古代の常陸大宮を知る

～後三ヶ尻Ａ遺跡発掘調査～

令和２年９月、個人用住宅の建設に伴い、後三ヶ尻Ａ遺跡の発掘調査を実施しました。その調査の概要をお知らせいたします。

●後三ヶ尻Ａ遺跡とは？

後三ヶ尻Ａ遺跡は、常陸大宮市上村田地区に所在する遺跡です。玉川右岸の台地上・村田小学校の上に立地するこの遺跡は、奈良・平安時代の集落跡とされており、『大宮町史』によると、同時代の土器を多数確認したと書かれています。しかし、令和２年４月に個人用住宅建設に伴う試掘調査を実施したところ、中世（鎌倉～室町時代）のものと思われる溝やピット（穴）が確認され、中世まで続く遺跡である可能性が高くなりました。その後、保護層の確保が困難となることから、記録のため９月に発掘調査を実施することになりました。

●調査結果

10 日間にわたる発掘調査の結果、中世の溝１条に加え、平安時代～中世までの土坑５基と、建物の柱穴と思われるピット 60 基が確認されたほか、平安時代の須恵器・土師器といった土器や、室町時代の古瀬戸（一部）などが出土しました。特に古瀬戸が出土したことで、単なる集落遺跡ではなく、この地を治めていた有力者の生活拠点であった可能性が出てきました。実際に、周囲を踏査したところ、土塁らしき跡も確認されたことから、中世城館のような施設が存在した可能性も充分に考えられます。

発掘直後の状況

●佐竹氏との関係も？

今回調査を実施した三ヶ尻という場所ですが、室町時代の古文書（「領地違乱書付」）にその名を確認することができます。この古文書は、当時佐竹氏が領有していた土地を記したものであることから、三ヶ尻一帯も佐竹氏に関連する人物が支配していたと考えられます。先ほども述べたように、中世城館が存在した可能性は考えられますが、この地を誰が治めていたかについてはよくわかっていません。城館跡との関連については、今後も調査をつづけていきます。

出土した土器・陶器

今回の発掘調査では、たくさんの方にご協力いただきました。これらの成果は私たちのふるさと常陸大宮市の成り立ちを知るための貴重な資料となります。今後ともご理解とご協力をお願いします。